

今を羽ばたく卒業生たち

～社会人となった今思うこと～

「卒業した塾生は卒業後どうしているのですか」という質問をよくお受けします。そこで、社会人として現在活躍している誉田進学塾の卒業生から、誉田進学塾での思い出を寄せてもらいました。社会人になった今思うこと、今の仕事に活かされていることなど、彼らの思いがつつられています。後輩たちに向けてのメッセージとともにお読みください。(誉田進学塾 **ism** おゆみ野教室長 神田)

私が入塾したのは中学に進学するときでした。地域密着で和気藹々。入塾前にもっていた、イメージ通りの塾だったと思います。

印象に残っているのは『あの夏』と言われる、中学3年生の夏期講習。普段は会わない別教室の人たちと一緒に勉強することで刺激を受け、モチベーションが上がったことを思い出します。やるべきことを示し、進捗を管理した「完成への道」や、他教室の友達たちとの競争など、やり遂げた達成感を演出し、やる気や自信を持たせてくれました。仲間と切磋琢磨し学習する環境作りをしてくれたのが誉田進学塾だったと思います。

先輩たちが経験を伝えに来てくれた激励会では、自分が高校生になったときを想像することができ、ラストスパートのきっかけになりました。入試当日に試験会場で不安と極度の緊張にあった私に声をかけてくれたこと、不合格にショックを受けた私を泣き止むまで慰め次の入試に向かわせてくれたこと、いまでも覚えています。学生時代にチューターとしてお世話になったときには、先生方やチューターたちが、いかに生徒のことを思い日々生徒たちと向き合っていたのか、改めて実感することができました。

中学生時代から理数科目が好きだった私は、悩むことなく理系を選びました。炎色反応のように身近で見える現象が面白いと感じて化学の道へ進み、東京理科大から大学院を経て、化学メーカーの研究職に就いています。興味があることを仕事にし、世界に通用する材料を作りだして世に送り出したいと研究に打ち込める今は、とても充実していると感じます。しかしその一方で、そのような材料の開発は一筋縄ではいかず、問題解決の糸口を掴むには忍耐強く努力を続けることが大切でした。このように忍耐強く物事に取り組む姿勢の地盤は、中学時代の誉田進学塾のカリキュラムを通じ会得したと自負しています。

高校受験は将来の夢を叶えるための通過点です。学ぶことは忍耐が必要で、自分との戦いになると思いますが、それにより自分の可能性を広げることにつながります。入試の可否に関わらず、多くを学び、吸収し続け、そして将来の夢を実現して欲しいと思っています。応援しています。

(千葉東高 東京理科大学卒 Nさん)

友達に誘われたのがきっかけで誉田進学塾に通うことにしました。エリートが集うスパルタ塾……という思い込みがありましたが、すぐ覆されました。勉強の量質ともにハードながら意外にアットホームで、楽しく通塾できました。

入試直前は、無心に自分と戦うのみでした。そんな中、合格リボン争奪戦や、先生 チューターからの激励文など、色々な企画で心がほっとし、メリハリつけて頑張ることができました。「やる気が出ないと思ったら、やったときに心の中で自分エライ！と褒めるといい」というアドバイスは、誉められて伸びるタイプの私には効果抜群でした。いまも面倒な仕事の際に実践しています（笑）。

高校生活は刺激的で世界の広がる日々でした。地理の授業でジャーナリズムの重要性を痛感したのがきっかけで、記者や編集者になるのが私の夢になりました。マスコミに強いと思って進学した早稲田大学では、同じ夢を持つ友人と一緒に、編集者 作家の先生に学ぶ事ができ充実していました。

目標を立て、それをがんばる原動力にしてきた私ですが、就職活動において人生初の挫折を味わいました。希望していたマスコミはことごとく不合格。情けなかったです。ただ、お陰で自分とよく向き合え、根性や度胸がついたとも思います。希望職種とは違いましたが、社会人生活をスタートしてみると意外にも経理や会社が自分に合っており、楽しく仕事に打ち込むことができました。もっと幅広い世界を知ることが出来る環境が欲しく、それが叶うと思われる監査法人に転職。企業の財務状況の分析や、各処理が法律に合うものかのチェックが主な仕事です。公認会計士と渡り合える経理になるのが今の目標です（ジャーナリズム関係も、往生際悪く諦めていません…笑 何かの形で実現させます…!）

私が通塾していた当時と今、様々な環境が違うと思います。その中変わらないであろうと思うのは、自分で考える力が身につく塾であることです。例えば先生方はみな、『質問するときは何が分からないのか明確にしてから』という姿勢を一貫しており、考え抜く癖がつかれました。これは社会人になった今でも役立っています。

後輩のみなさんにも、今は、目の前の勉強を頑張っって欲しいと思います。必ず結果はついてきます。高校、大学生になったら、ぜひ自分の所属する組織外の人やモノにも飛び込み、自分の出来ること、やりたいことを見つけて下さい。

（千葉高 早稲田大学卒 Eさん）

中学校に上がるときに親に勧められて入塾試験に参加しました。塾というと、みんなぎすぎすして居心地悪そう……というイメージがあって気は進みませんでした。いざ行ってみると想像とは全く違い、試験監督のチューターさんが自分の家の玄関から出てくるみたいに出迎えてくれました。試験を受けながら、「この塾だったら通ってみたいかも」と思ったことを覚えています。イメージしていた「塾」とは違ってアットホームだったところが、頑張れる理由のひとつでした。

もともとマイペースなので、正直、誉田進学塾のペースを、きつい、つらい、と感じて塾に行きたくないと思ったこともありました。でも今思えば、塾の仲間たちとの競い合いを通して、悔しいとかっていう気持ちが生まれることが勉強する意欲につながっていたところもあるなあと思います。友達だけどライバルでもある友達との付き合い、勉強のしかたや、高い目標に挑戦すること……多くを学びました。

お世話になった憧れのチューターにいざ自分になってみると、中学生との接し方に悩んだり、教えることの難しさ、頼ってもらえたとき、わかってもらえたときの嬉しさ…。本当に色々な経験があって、今の自分があるのだと思っています。

いま私は物流業界で働いています。国際航空貨物輸送といって、お客様の荷物を海外に送るため航空会社に手配する仲介の仕事です。上司によく言われるのが「納得するまで考える」ことです。学生の頃からずっとそうだったので、私にとっては自然なことです。この問題はこれをすれば解ける、といううわべだけではなく、この問題はこういうふうになっているから、これをこうやってやれば解けるというか……うまく言えないですが、ちゃんと問題の根幹を捉えるように誉田進学塾で教えてもらったからだと、こじつけではなくそう思っています。大学で学んでいたロシア語を直接使うことはありませんが、大学時代の国際交流がきっかけで海外とやりとりをする仕事に興味をもち、今もやりがいを感じています。ロシアに駐在所があるので、いつかはそこで働いてみたいと思っています。

いま一生懸命勉強に取り組んでいる後輩たちには、失敗や間違いを怖がらず、なんでもプラスに考えて欲しいと思います。失敗したら悔しかったり、間違えたら恥ずかしかったりします。でも私は「いま間違えておいてよかった」と引きずらないようにしています。嫌なことがあっても、でもこの部分はよかったと、少しでもプラスな点を見つけたり、人と接していて何か嫌な思いをしても、でもこの人ここはいいんだよな…と思ったり。おかげで毎日充実しています。

(千葉東高 東京外語大学卒 Mさん)

近所の幼馴染が通っていて、その子のお話を聞いていたら「なんだか塾って楽しそうなところだなー」という印象を持ち、私も通うことにしました。塾で勉強していた間は、小学校や中学校が同じ友達と一緒に仲良くがんばりましたが、夏や冬の合同授業でほかの教室の人ともお互いに面識があったおかげで、高校で一緒になると塾のことを共通の話題に盛り上がり、いまでも続く友達になりました。

入試では最後の最後まで確実に自信をもてるようにして、第一志望の高校の受験会場に送りだしてもらったなあ、と思います。数多く受けた入試だったので、もちろん落ちたところもありましたが、それでも次に向けて必ず先生が声をかけてくれ、励ましてくれ、毎回自分が勉強してきたことが全部出せるような心持ちで受験会場へ向かっていたことを覚えています。

第一志望だった千葉高から上智大学に進み、そして、狭き門と言われる出版業界の編集職につきたくて就職活動を始めました。しかし大きな出版社は軒並み不合格。私には向いていないんだ……と思いました。次の4月からは仕事をしなければ！という焦りもあったため、まったく違う業界の入社試験も受け、内定をもらいました。でも、そのことを誉田進学塾の高校部に報告しに行ったとき、先生に「本当にそれでいいの？ 後悔する気持ちがあるのなら、まだ時間はあるよ。」と言われました。その言葉をきっかけに再度出版業界への就活を再開し、いまは念願かなって出版業界の編集者をしています。思い返してみると、中学生のときも同じでした。受験面談で、不合格では困るという考えから煮え切らない答えばかり言っていた私は、先生に「うん、そこなら確実に合格だろうね。で、それでいいの？ うれしいの？」と聞かれて、やっと自分の目標を明確にできたのでした。いま、改めて、目標を明確にし貪欲に追いかけていくことが達成への道であることを、小中高と通った誉田進学塾で教えてもらったということを実感しています。

誉田進学塾の、受験のための詰めこみではない勉強は、大人になった今、本当に役立っています。目標を達成するためにどうするか、何をすべきか、ということへのアプローチ方法は受験だけでなく就職活動でも役立ちました。何より、いまの仕事で、納期の短さと自分の能力の低さのギャップを埋めるためにどうしたらいいのか…という壁に当たったときにとても助かっています。ベストセラー出したい、という思いを遂げられるよう、これからも努力していきます。

(千葉高 上智大学卒 Aさん)

兄が通っていたことと、先に通っていた友達から雰囲気を読み「一緒に通いたい」と思ったのが入塾のきっかけでした。毎週の演習テストではなかなか合格できずに追試の常連。ほぼ毎週のように追試に参加していたと思います。帰る時は、「やっと終わった」という気持ち半分、「その追試の分野が出来た」という気持ち半分という具合でしたが、全体を通して思い返してみると楽しくやっていた記憶が強いです。another と the other の使い分けがどうしても分からなかったときに、チューターさんがドラゴンボールの一星球を使って説明してくれ理解できたのを覚えています。

中3 夏期講習のことは、今でもはっきり覚えています。毎日7科目のテストは大変でしたが、あの夏なくして秋以降の伸びは無かったと思います。高校受験のときは英作文を甘く見ていたこともあって第一志望の高校に進学することはできませんでしたが、大学受験でも同じように基礎を固めて秋から応用というスケジュールで学習して第一志望の大学に進学することができました。高校受験の失敗を反省して毎日英作文を続け、受験の際は自由英作文ではほとんど苦労しなかったのも大きかったと思います。当たり前のことですが、地力をつけるためには積み重ねが大事だと実感しました。

高校入試では、私立のチャレンジ校が不合格でかなり落ち込みました。それでも公立高校の受験日が迫ってくるなか勉強できたのは、塾に行くと同じ高校を目指している仲間がいたからだと思います。ふりかえってみると、中学生のときは、自分の主張はするけれど、相手との折り合いはつけたがらない部分があり、両親や先生方に迷惑をかけてしまったと思います。そんな私に対して、毎日お弁当を作ったり送り迎えをしてくれたりした両親や、丁寧に教えてくれた先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

高校受験では、結果だけを見れば、第一志望校には合格できませんでした。でもそれが、自分の学習に対する姿勢を考えるきっかけになりましたし、大学受験では第一志望に受かったということを鑑みれば、高校受験の成果としては良かったと、いまではそうとらえています。高校受験のときは、とにかく高得点をとらなくてはとあせっていましたが、大学受験のときは、自分の力を出し切ることを考え、結果はどんなものでも受け容れようと考えていました。自信とは、努力の日々を重ねて作っていくものなのだと思います。「報われない努力はあるかもしれないが、身につかない努力はない」という考え方を教えてもらっていたことも自分の支えになったと思います。

(市原中央高 千葉大学卒 Mくん)